

## 構造主義についての一考察

—特に構造と歴史との和解を中心として—

前 川 知 賢

### I

マルクス主義や実存主義に代ってあらたに構造主義が唱えられはじめ<sup>1)</sup>思想界において大旋風を捲き起し、それがフランス本国からこの国へも波及して来た。ところでこの思想は、その開祖レヴィ＝ストロース (Claude Levi-Strauss) にみられるように、未開人の社会を対象とし、そこに無意識の裡に支配している経済や女性や言語の交換の〈構造〉を発見し、<sup>2)</sup> かつそれを時間的すなわち通時態 (diachronie) を捨象して専らその超時間的超個人的すなわち共時態 (synchronie) によってこれをなさんとするものである。だから、それは反人間的、反歴史的、反現代的性格をもち、ある意味では反動的イデオロギーとして作用するものですらある。そして、この点についてすでに多くの批評や攻撃がなされているのだが、どうしてこういう思想が台頭してきたのであろうか。これについていわれるのは、ひとつはスターリン批判を契機として起されたマルクス主義の權威失墜とその多元化、ふたつは、アルジェリヤの独立が予想外の反近代的な民族主義の出現、A・A勢力の台頭などとなったことから招来された〈近代〉への失望がフランスの進歩的知識人を反転して未開社会へ、古代へと赴かせたものであろうということだが、これはある程度真を射ている。そのことは、構造主義の三銃士として今喧伝されている精神分析のラカン (Jacques Lacan)、哲学及び文芸のフコー (Michel Foucault)、及び経済学のアルチュセール (Louis Althusser) らがかつて熱烈なマルキストだったことによって背かれるだろう。かれらは、急進的だったがまた一面原始社会へと

憬れたルソーの先縦に従ったわけである。とともに、そのことはまたドゴールの工業化政策と経済成長による安定ムードによって推進されたところでもあるといわれるが、これも恐らく真実であろう。<sup>3)</sup> しかし私のみるところでは、それは今少しく深層から発しており、いわゆる現代文明に対する反省から引出された必然の成行きではなかろうかと思われるのである。

たしかに現代科学は進歩し、文明は高度化した。S F的な明るい将来すら語られるほどである。しかしそれによってわれわれ人類が現実・に・明るく、幸福になってゆくだろうかという・と、それはまさに逆なのである。疎外と人間不在は深くなり、われわれはいよいよますます追いつめられつつある。サイバネティクスやコンピューター文明の進歩は容赦なくわれわれ人類を機械や物質のひとこま、その部品と化しつつある。高層建築、大層・高・楼も蜜蜂の巣であり、われわれ人類はあらたなる〈中世〉へと逆転してゆくであろう。こういった諸現象は現実である。構造主義はすなわちかかる文明の事態に着目し、そこに支配している法則を知悉して・もって、何等かの活路を模索せんとするものである。われわれは、自己が自由であると思っているが、しかし実はわれわれならぬあるものによって操られているのである。構造主義はこういった文明の帰趨に対する反省から出ているのであって、かれらが未開社会や古代に憬れるのも、この熱い社会がその内容において全く空疎であり、そこからし・ず・か・なる古代の英知に学びたいとの欲求を激発されたということは、レヴィ＝ストロース自身の明言するところであり、かかる一面からすれば、かれらの意図に建設的なもののあることは、たとえかれレヴィ＝ストロースが、人間精神が改良されようとされまいと全くどうでもよいことだと、うそぶき、またその他の構造主義者が異口同音にそれぞれ不吉な予言的文辞を弄していようと、否定されえぬ事実である。<sup>4)</sup>

そしてかれらの射程は極めて広汎にわたり、人類学、言語学、民族学をはじめとして、精神分析や経済学の世界ばかりでなく、フランス本国では更に神話学や文芸方面から演劇にまでおよび、ロックのいわゆる第二性質の世界まで包含している。この国でこの思想が輸入されはじめたのはよう

やく昨年あたりからであり、徒らに売らん哉の紹介や批判のみ盛んであるものの、レヴィ＝ストロースの原典の邦訳すら殆んど出ていない現状である。そしてこの国の事情はフランス本国と同じではなく、その安定ムードにもより明るい面をもっている等の点よりその先行きは多く期待されぬとも考えられるものの、しかしマルキシズムへの失望、〈近代〉への懷疑は劣らず深刻であり、また疎外や人間不在の重圧日々に加重されつつある現実などよりの帰結として、それが一段と高揚され、普遍化されてゆくだろうことは、想像に難くない。

構造主義是か非か。すでにこれについて、サルトルやルフェーブルなどから、「テクノクラシーの台頭に呼応する現状維持のイデオロギーである」とか、「その反歴史主義の故に、マルクス主義に反対するためのブルジョアジー最後の防壁だ」とか、いった辛辣な批判がなされていることは周知のとおりだが、果してそうであろうか。今まずこれを哲学や思想の領域についてみた場合、未開社会や古代を対象として採りあげ、それをその共時態において分析し、その間に存する可知性を明らかにすることは、それ自体としては極めて有意義なことであり、特に人類学や民族学において従来みられなかった斬新で卓越した方法としてみとめられねばならぬとしても、その成果を直ちに移してもって現代文明の指針、当来社会のコードとなすことには問題がありはすまいか。それは時代錯誤、回顧主義ではあるまいか。また、構造主義は歴史的進歩を否定し、その過程外に出ることをその方法とするが、このことは科学の方法としても、はたまた歴史に対する理解としても決して無稽のことではないばかりか、むしろその正鵠さにおいて卓越せるものをもつことは認められねばならぬとしても、偏頗であることは否定されえぬのみならず、反動イデオロギーとして作用する惧れなきにしもあらざることにおいて、有害有毒の思想といわざるをえぬのであるまいか。卒然としてこれをみれば、以上のように考えられるのであって、多くの人々がこの思想に対して抱くところは大体こういったところだろう。たしかに論者のいうとおりで、その中に何パーセントかの正しさのあることは事実であるが、しかしわれわれはまず寛容且つ慎重であらねばな

らぬ。謙虚にそのいうところに耳を傾けると、構造主義者のいうところにも、やはりそれ相応の真理と根拠とがあるからだ。まず第一の点からいうと、レヴィ＝ストロースは何よりも科学的実証的であることを目標としているのであって、何も哲学やイデオロギーを提供しようとしているのではない。その点フコーとは大いに趣を異にし、しかもその上でなおそれがひとつのイデオロギーとして、哲学として、現代の問題に対して作用していることを否定してはいない。そして、われわれはそのことが許されぬことでないばかりか、また極めて緊要な、ある意味で不可欠の存在理由たる所以を信ずるものである。あたかもマックス・ウェーバーの合理主義がそれ自体は〈科学的〉であることを庶幾しつつも、近代市民社会のエートスを代弁していたように、同様のことがこの構造主義についてもいわれるのであって、それはまさに黄昏時代の近代の救済のイデオロギーとして、動かしえぬ、現実的な指針を提供しているのであるまいか。その意味でこれを頭から時代錯誤的思想、回顧的イデオロギーときめつけてかかることにも一考の余地が残されているのであるまいか。同様のことは、第二の点についてもいわれうるだろう。構造主義者が歴史的進歩を否定し、またその学的方法においてその過程外に出ることを綱領の一つとしていることは、サルトルとの間に大いなる対立を意味するところから、両者の間にはげしい論争のあったことは周知のことで、そしてそれはそれ自身当然のことであろうが、しかしレヴィ＝ストロースとて決して歴史、歴史的時間の存在そのものを否定しているのではない。例えば彼は言語について、その学的研究においてもっぱら共時態としてのラングにのみ着目し、通時態としてのパロールはこれを考察の範囲外に置いているものの、しかし決してパロールを無視しているのではない。両者を総合する汎時態（panchronie）をも考慮に入れているのであって、このことは彼がその言語学的研究の師とするド・ソシュール（Ferdinand de Saussure）とその軌を一つにしているのである。レヴィ＝ストロースがしかする所以はもっぱら歴史に対するオプティミズムに対して戒めねばならぬとの認識からであって、サルトルのいわゆる〈全体化〉の弁証法のごときそのもっとも大なるものとして映ずる

のであろう。従って彼とて決して弁証法そのものを否定するものではなく、要はその全体化の投企を〈現実〉に照応するよう少しく引下げることが提唱するものであろう。このことは決して無稽のことではなく、例えばアルチュセールの解するマルキシズムにその実例が見出されるのである。アルチュセールは、マルクス主義を否定するものではない。それを高度資本主義社会に適合するよう変容せしめたのであって、そしてその理論の武器としてとられたのが外ならぬ構造主義なのである。——以上のごとくみるならば、構造主義のいうところも決して無根拠でないどころか、大いにその理由が存しているわけである。

次にこれを文芸や演劇についていった場合、作品を構造主義的に分析することによって果してよくその理解が得られるであろうか、それは不自然ではなかろうかということは、何人の頭にも仄く第一印象だろう。構造主義は作家の履歴とか思想とかいった主観的要素を離れて作品を作品そのものとして、しかもそれをラングやシンタクスの面から、即ち音韻、文法、構文などにわたって分析せんとするものであるから、一切が記号として扱われ、従ってそこからパロールは勿論意味の部分が大きく欠落して、徒らに形式的となる。そこでは主体の創造とか、作家の個性といった面が無視されることは、否みえぬ。しかもこれらのものこそまさに作品の生命であってみれば、評者が上のごとき見解をとったことも、当然であろう。乍併、作品の美が例えば詩におけるごとく音韻や作詩形式の美にあることは、厳たる事実である（われわれはその適例を芭蕉の俳句にみることができる）し、よしそのことは別としても、私は芸術品に限っていった場合、いわゆる構造分析のはしりがすでにきているのではないかと思われる。作品を主体客体の関係としてでなく、いわゆるオブジェとしてみる立場がそれである。フランス本国におけるアンチ・ロマンやアンチ・テアトルの運動がそれである。否、私のみるところでは、すでにシュールレアリズムこそまさに構造主義的方法の具体化したものであろう。さらにこの運動にはロン・バルトの零度の文学や、ロブ・グリエやベケット、ブランショなどのエテロトピー的構造の理論すら連るところであると、思われる。現にこの

国でも、詩についてフコーの理論にふれ、またエテロトピー論をなした天沢退二郎氏のごときがあり、また何よりも入沢康夫氏の詩の構造に関する一連のエッセーのごときも、異なる意味においてはあがあるが、構造主義的分析の線に沿った一つの試みとして、大いに注目さるべきであろう。<sup>5)</sup>

乍併、実存主義者やマルキシズムのいう〈構造〉がレヴィ＝ストロースやフコー、ラカン乃至アルチュセールのそれと同一のものであるか、どうか、かれらのいわゆる構造主義的分析の成果なるものがどれほどわれわれ現代人の作品に対し偉力をもち、また効果をもたらすものであるか、どうかという、そこに一沬の疑いなきを得ないのである。右の二分野のうち文芸や演劇部門のことについては、特殊的な分野であり、且つ別のところで発表もしているので、<sup>6)</sup> これを省略し、以下主として哲学や思想、社会科学の分野における構造主義的分析の理論を一瞥し、ついでこれに対するマルキシズムや実存主義の側からの批判をサルトルをして代表せしめて彼此対照しつつ、両見解の接衝和解について論じることになし。特にこの後の点が本稿の核心であることを予めおしらせしておきたいと思う。

## Ⅱ

しかしその前に一言断っておかねばならぬことがある。すでに示唆したとおり、一概に構造主義といっても、種々の構造主義があり、<sup>7)</sup> 特にレヴィ＝ストロースとフコーとでは正反対の発想をしているということである。レヴィ＝ストロースは科学的方法的ということを第一義とし、自分の構造主義は何も哲学やイデオロギーを提供するものではないと明言しているのに反し、フコーはあたかも予言者のごとく熱っぽい口吻をもって一種の哲学を語っているのである。しかもその結論は、前者はむしろ明るく、これに対し後者は暗く運命論的である。哲学や文芸に関する限り、フコーの方がより有名であり、人気にめぐまれている。しかし、構造主義ということに関する限り、フコーは結局脇役にすぎないであろう。以下まずフコーについて論じ、ついでレヴィ＝ストロースその他に移りたいと思う。

最近ポーランドからの亡命作家ヴィトルド・ゴンブロヴィッチが「コス

モス」(1965)なる小説を発表した。彼はすでに渡仏前「フェルディドルケ」なる作品を発表して有名だったが、その作品は主体であると信じていた人間がいつの間にか自己を喪失して事物化していたという、現代の矛盾をテーマとしているのだが、これはベケットがその主人公に「私は存在しない、これは周知の事実だ」といわせていることや、ロブ・グリエの非人称的なざしや、イオネスコにおける「反世界」とも歩調を合わせているものだが、<sup>5)</sup> こういった「外部」世界的現実を踏まえて、その過程を哲学的に考察し、特に詩において働く〈狂気〉によってその回復と転回をなしうるとというのが外ならぬフコーの『言葉と物』(Les mots et les choses, Paris, Galimard, 1965)を代表とする一連の著作である。この書は難解をもって鳴っているが、しかし彼がその中でいっていることは存外簡単である。現代において言葉は物（自然的事物ではなく存在の義）から離れ、故郷喪失しており、且つその全体性を奮われ、支離滅裂化しているというのがその骨子だが、レヴィ＝ストロースとすこし異り、彼は『言葉と物』では主として近代を対象とし、そのことは17世紀から開始されたと考える。すなわちルネッサンス期において両者は〈相似〉の関係にあったが、それが近代に入り、年を経るに従って背反してゆき、次第に加速度的に鋏状化し、現代において両者は全く別個のものとなった。すなわち言葉は全く物から離れて表象せず、機能化し、またいわゆる〈名付け〉の現象にみられる〈名〉のみとなった。伴って人間主義が征覇し、すべてが専門的に分科し、これを架橋する〈全体科学〉はその姿を没してしまったとし、彼はこれをエピステマーと称する〈認識の場〉に分けて、それぞれセルバンテスやサドの作品を引用しつつ、これをなしているのである。然らば今後その極どうなるのかということ、彼は存外安易で、反動として文学が生れ、言葉を物に返し、またそれを全体として捉える運動が生起する、そしてそれはすでに19世紀末から開始されているという。真実の文学が19世紀末から生起するとはおかしいようで間違っているはいないが、しかしそれはともかく、そういった運動の中核となるのが詩であり、而してそれをなさしめるものは、詩の中で働く〈狂気〉であるという。狂気とはフコーにおいて理性と非合理以

前の原点の義であるが、具体的にいえば、彼自身は明言してはいないが、フロイドの〈無意識〉に連る一種神秘主義的意識の世界であろう。フコーによれば、そこにわれわれの帰り行くべき共通の神話、神託の世界がある。こういった神話の世界があり、その実在を信じていることにおいて、かれも構造主義者といわれる所以がそこにあるわけである。

ここで前進する前に、少しくフコーの認識論について、批判的考察を加えておきたいと思う。われわれはいかにして神話の世界を捉えうるかという、結局いわゆる〈自動筆記〉に訴えるの外ないだろう。しかし詩的内的でなく、もっぱら「外部」からの方法によってこれをなそうとする立場から、このことは如何にして可能であろうか。フコーの場合、主体と外部とはあまりにも断続されており、その間を架橋するものはない。こういう立場でいかにして物の認識、その内在化が可能であるのか、われわれは了解に苦しむのである。ここで私見をいうと、メルロ＝ポンティもいっているように、無意識というのは一部で解されているような本能といったものでなく、やはり一種の意識なのである。<sup>9)</sup> とすると、両者は全く異質のものでなく、連続しているものであり、従ってわれわれ個々人の立場からもそこに近接する道もありうるわけである。とすると、更に、〈狂気〉などといった特別の能力をもってせずとも、物の把握は可能であり、そう考えることの方がより自然且つ整合的なのであるまいか。

しかし以上は別として、さらに一歩進んで考察すると、右のごとく神話の世界へ近接することが困難なところから、フコーのいわゆる全体の世界も多分にニヒリズムを加え、ニーチェの永劫回帰の世界を思わせるものになり、結局彼の目ざすモラルは運命愛ということになるだろう。彼がレヴィ＝ストロースの笑う構造主義に対し泣く構造主義を説くものであるといわれるのもその辺りに胚胎するのであって、<sup>10)</sup> とにかく、不吉な風がそこから吹いて来ることは、いつわらぬ事実だろう。しかし、そのことは別として、私はさらにそれが〈閉された〉システムをいうところから、そこに紅衛兵的といわんより、より多くナチス的革命への郷愁が秘められていることに、一種の怖れにも似た感情を抱かずにおれぬのである。



## Ⅲ

扱て、レヴィ＝ストロースの構造主義にとっ第一義とされているところは、科学とイデオロギーとを峻別し、イデオロギーとしての構造主義を排し、科学としての構造主義の樹立をめざしているということである。上来幾度か引用したとおり、自分の構造主義は何も哲学やイデオロギーを提出するものでないとは彼自身つねに明言するところであり、彼はかたくななほどに科学の領域をはなれ、方法としての立場からはみだすことを戒めているのである。このことは、フコーは別として、爾余の構造主義者にも共通するところの、つよい背骨であろう。

では、科学としての、方法としての構造主義とはどういうことであるか。科学的とか、方法的とかいうことはいうまでもなく、事象を主体との関係においてでなく、存在自らとの関係において理解することだが、レヴィ＝ストロースらにとっても同様である。彼はそのことをその『悲しき熱帯』において「實在に到達するために、われわれはまず体験されたものを拒否すべきであり、それを一切の感傷をぬき去った客観的総合の中に組み入れるとしても、それはその後のことである。」と、要約しているが、まさにそのとおりである。レヴィ＝ストロースの後継者乃至その学派の戦士をもって任ずるアルチュセールや（若くして逝去した）リュシアンセバークらは、イデオロギーの時代はすでに終末に達したとし、且つイデオロギーとは〈個人〉のアンガジュマン方式にすぎぬとまで思惟しているのであるが、こういった考え方に行き過ぎなしとせぬもののかれらがいかにイデオロギーに対して背を向けているかの一証左として注目すべきところであろう。とにかく、かれらは一様に、かたくなばかりに、科学としての、方法としての構造主義を固守しているのである。

そして、科学的とか方法的とかいうことにも種々の行き方があるのだが、レヴィ＝ストロースにとって特徴的なことは、分析的であり、否、文字どおり原子論的であるということだ。彼が構造とかシステムとかいっているものは、われわれのいわゆる〈全体〉とか、〈ゲシュタルト〉ではな

その二は、ソシュールはラングの一語一語を分解して、究極の要素、いわゆる音素をとり、音素のもつ特質とその結合とから各語の発生する過程を分析し、そこから言語発生の可知性を究明したが、この方法に倣ったということ、これである。音素がその発声的その他の性格上プラス、マイナス何れかの特質を有することは、つとにヤコブソン (Roman Jakobson) の明らかにしたところで、そしてそれぞれの音素の結合により〈語〉を生ずる場合それが示差的 (différenciel) であれば足るわけだが、これを図示すると、英語の発音では次のとおりである。<sup>13)</sup>

[illegible]

レヴィ＝ストロースは、言語構造についてのかかる分析を神話にも、親族構造にもおよぼし、そこからその間に支配する可知性を分析しようとするもので、神話分析では、「カドモス妹エウロペを殺す」とか「オイディポス母と結婚」とかいった短文が音素に当り、また親族構造の分析では、夫婦・兄妹・父子・伯父甥の4つの関係（それぞれ親疎をプラス・マイナスとする）が単位として設定され、その結合関係が分析される。

その3は、記号学の導入である。言語は観念を表現する記号の体系であり、それは意味するものと意味されるもの、すなわちいわゆる能記と所記の統合体であるというのがソシュール言語学の一特質であるが、レヴィ＝ストロースはここから、社会における儀式とか風習のごときものもかかる記号の一であるとの見解に達し、構造に至るのであって、その論理は次のごとくである。即ち、たとえば未開人の社会においてトーテムをもつことはどこでもみられる風習で、それは何ものかを意味しているはずである。トーテムポールはいたるところに立てられているが、それによって意味されるものは何かということになると、そこに何ものかがある。それは明確には意識されてはいないが、しかし結婚であれ、祭礼であれ、はたまた神話であれ、ひとつの集合表象であって、厳として規制的に作用するところのものである。これが外ならぬ〈構造〉であって、これを分析解明することが外ならぬ構造主義の目標だと、レヴィ＝ストロースはいうのである。

以上のとおりだが、なお今一言付加すると、構造とは前述のごとく、いわゆるゲシュタルトではなく、さりとて数値のごとく一義的なものでもなく、いわゆる力学的モデルであるということが、ひとつの重要なポイントであることを、銘記するの要があろう。（この点後述）

さて、レヴィ＝ストロースは以上のごとく音韻論の方法から出発して、神話素、親族単位（各々すでにひとつの関係である）を設定し、その離合集散によって神話や親族関係の生起する過程の可知性を分析しようとするものであるから、構造とは関係の関係の義となるであろう。すなわち、言語学におけるいわゆるシンタクスを明らかにすることがその目標というこ

とになるであろう。しかしこのことはこれで措き、その構造分析の実際を示すと、その効果をもっともよく表示しているのは、親族構造の分析であろう。周知のごとく、それは彼が南米未開人を対象として行なったところであるが、各氏族各部族間の結婚状況（女性の交換状況）を数世代にわたって考察すると、そこに一定の法則が見出される。すべての社会がそうとはいえないが、父権制が多く、その場合そこではクロス・カズン婚が大勢を占めている。で、前述の親族単位の組合わせは、次の4つに限られる。左上を夫婦関係、右上を兄妹（または姉弟）関係、左下を父子関係、右下を伯父甥関係とし、その間の親疎を+、-で表わすと、

$$\begin{pmatrix} - & - \\ + & + \end{pmatrix} \quad \begin{pmatrix} - & + \\ + & - \end{pmatrix} \quad \begin{pmatrix} + & + \\ - & - \end{pmatrix} \quad \begin{pmatrix} + & - \\ - & + \end{pmatrix}$$

これ以外の  $\begin{pmatrix} + & - \\ + & - \end{pmatrix}$   $\begin{pmatrix} - & + \\ - & + \end{pmatrix}$  というのもあるが、これは存在することが極めて少ない。この場合父、子、兄（弟）、妹（姉）はすなわち親族関係の元素、家族素であり、親族関係はこれら兄弟姉妹の血縁と、縁組と、親子関係とから成立している。そしてそこでは、クロス・カズン婚が必然ならしめられる。すなわち男はその妻を他の男からのみ与えられ、彼女の結婚の相手は父の姉妹か母の兄弟の子に限られるということである。父権制社会ではこのことが不文律として代々とり行なわれているのである。かく、すでに近相相姦から別れており、且つそこにすでにある組織をみるのだが、これは何が故かという、未開社会では各氏族間、各部族間の労働力の均衡ということが第一義の要請であり、結婚はそのことを目安として行なわれ、それによって社会は平和を保ち、無事に存続してゆくからである。これはかれらが近親婚から別れて経済の困難に直面した場合その生存を完くしうるために示した英知のあらわれなのである。勿論何も教えられてのものではなく、また特別の計画によって指示されて然しているものでもない。しかしそこに一種のコードとして、システムとして蔵存しているのである。

今少しくこれを他の面からみると、これを数世代にわたって考察すると、各氏族各部族の間勢力の均衡があり、一方のマイナスは他方のプラス

となること、数世代の間には平均されて、その間に平衡が成立つという仕組みになっているということである。こういった考え方は、かつて高田保馬氏によって〈勢力説〉の名の下に唱導されたところだが、即ちそういった巧まぬ英知をレヴィ＝ストロースは〈構造〉と名付けるのである。

なお、レヴィ＝ストロースはこれを神話の分析に適用し、またヤコプソンと共同でボードレールの詩作品『猫』にも試みた。その詳細は省略するが、ここでは神話や詩が、観念の日常的次元と存在論的宇宙論的次元の和解のための論理的道具として作用していると解される。これはやはり、一種の〈構造的〉理解だろう。（詳細は中央公論一月号特集参照）

#### IV

以上がレヴィ＝ストロースの構造主義の基本とその分析の実例だが、われわれはこれをいかに受止めるべきか。レヴィ＝ストロースに対してなされた批判はすでに枚挙に遑なく、敢て蛇足を付加するの要もあるまいが、中でも注目を惹いているのはサルトルのそれで、両者の間に論争の火花が散らされたことは、すでにあまりにも知れわたっている。そして、実際サルトルの批判も、これに対するレヴィ＝ストロースの見解も、このことに関する限り、核心を衝いており、やはり重要な意義を有している。よって、次に両者のやりとりについて瞥見し、その帰趨について考察することにしよう。<sup>14)</sup>

さて、サルトルはその『弁証法的理性批判』の序論とみられる『方法の問題』（邦訳人文書院版78頁）においてレヴィ＝ストロースの人類学説の成果を取り入れ、「実存主義は、人間学がひとつの基礎をみずから得ようとする限りにおいて人間学そのものである。」とし、そしてその基礎を「諸物が人間によって媒介される丁度その限度だけ、人間の方も諸物によって媒介される。」という相互的媒介の発見の裡に見出したのであるが、これは外ならぬレヴィ＝ストロースの人類学の教えるところであろう。よく知られるように、サルトルは『弁証法的理性批判』において〈物質〉を導入し『存在と無』の二元性から三元性へと進み、そしてそのために援用されたのが、

外ならぬ、物質の媒介によって親族構造が規定されるという構造主義の成果だった。これに対しレヴィ＝ストロースの側でも、人類学をもって一種の全体科学であるとしていることは明らかである。まさに彼が「人類学は社会的と名乗ろうが文化的と名乗ろうが、つねに考察の対象となる全的人間を、一方ではその生産物から、他方ではその表象物から認識しようとするものである。」と、いっているとおりである。人類学にとって、要素とは全体から切り抜かれたものというより、全体を濃縮した特殊の型とも称すべきものであろう。従って、両者の間それほどの差異は存在しない。にも拘らず、レヴィ＝ストロースはその『未開の思考』の終章においてサルトルの全体化の理論を批判し、特にその歴史性を否認したのである。それはこの上なく鮮かにその不一致を示したものだが、一方サルトルもこれに答えて、レヴィ＝ストロースの構造主義の世界は自己の弁証法の対自態、実践的惰性態の段階にすぎないとしたのである。この対立は両派をめぐっての対論の典型ともみられ、その意味では、極めて象徴的であろう。

われわれはまずこの論争を契機として、この二律背反に対する見解を明らかにしたいが、まずレヴィ＝ストロースのサルトル批判の根拠はどこにあるのだろうか。これを明らかにするには、まずレヴィ＝ストロースの歴史観を一瞥するの要がある。<sup>15)</sup>レヴィ＝ストロースが歴史を否定する根拠はどこにあるのか。抑々あらゆる認識は対象を分析するためにそのコードすなわち符号システムを必要とするが、歴史に於ても例外ではありえぬ。歴史認識のコードは何か。年代記がすなわちそれである。歴史は非連続的総体であって、各々の領域は固有の周期をもち、先後関係を示す示差的符合法によって定義されるであろう。ところで、レヴィ＝ストロースによれば、各領域に属する日付は、他の領域の日付に対して相互に移行を許さない関係にある。歴史には時間、日、年、世紀、千年紀など周期を異にする種々の歴史がある。そして、各々の間に連絡はない。一方これら各周期の歴史の内容をみると、あるものは例えば伝記や逸話の歴史のごとく情報は豊富であるが説明に弱く、一方説明にはすぐれているが情報に乏しい歴史がある。しからば、この矛盾をどうして解決するかといえ、結局歴史の外へ

出て、例えば前者については心理学へ、後者にあつては生物学へと赴くのではなく、それによって却つてよりよく説明されるであらう。蓋し、われわれは情報と可知性の二者択一性に惹かされざるをえないからで、以上のごとしとすれば、われわれは歴史の外へ出てしまわざるをえず、歴史的認識は幻影というの外ないであらう。——以上がレヴィ＝ストロースの歴史観であり、サルトルへの否定もまたここから出て来るわけである。

なおここで序でながら、このことを進めてマルキシズムの解釈にもおよぼし、いわゆる構造主義的理解を進めたアルチュセールについて述べておくことが、よいであらう。マルキシズムについてフォイエルバッハの人間学的傾向をもつ前期と、史的唯物論の理論を基礎とする後期とを分つことは一般に行なわれるところであるが、アルチュセールはその科学主義の立場から前者の人間主義的要素をつよく否定し、イデオロギーから科学へ、弁証法から構造へと、前進せしめようと図り、すなわち下部構造を意味するもの、これに対し上部構造を意味されるものとして、構造主義的に理解したが、その根底となるものこそ外ならぬ、以上のごとき歴史的知識の空白性であらう。そしてその根底にあるものが、科学主義的、方法主義的精神なのである。

次に、これをサルトルはいかに受とめているかという、その答えは極めて簡単である。サルトルにとって、レヴィ＝ストロースの静態的構造的な世界は自己の弁証法の対自の世界、すなわち人間性が物質性により媒介されて物化した、いわゆる実践的惰性態の世界に外ならぬ。<sup>16)</sup> しかもこういった世界は弁証法の一部にすぎず、人類はやがてそこから起上つて集団を組織し、よつてかかる物質による〈疎外〉から自己を恢復し、解放してゆくのであり、そこに分析的ならぬ弁証法的理性がはたらくのである。人類にはそういった能動性が与えられているのである。

以上極めて粗雑な形ちにおいてではあるが、レヴィ＝ストロース対サルトルの論争を要約した次第だが、われわれはこれをいかに受止めるべきであらうか。この対立はさらにこれを定式化すれば、分析的理性に対する弁証法的理性の、歴史なき社会と歴史的社會の、体系と全体化の、また理論

と実践との二律背反として定式化しうるであろう。抑々この二律背反はいかに和解され、いかに調停さるべきであるか。又実際現実はかかる定式化のとおり互いに二律背反的に作用しているであろうか。われわれはかく問わざるをえぬが、果して如何。

で、今一度両者の対立をいうと、レヴィ＝ストロースにとって人間の背後にメカニズムを見出し、物を見出すのに対しサルトルは自由を見出し、それによって物を構成しうるとの観念が支配しているのである。物と自由、メカニズムと目的観—このヘテロロジーが両者の対立の根底なのである。この対立はしかし、しかく根源的なもの、徹底的なものであろうか否か。これについて、ひとつ私の感ずるところをいうと、最近サルトルの主宰する「現代誌」に特集された『構造主義の諸問題』の中でピヨン（Jean Poullion）が展開している見解、竝に特にアルク（弓）誌（L' Arc）第26号レヴィ＝ストロース特集号に掲載された同氏の見解は極めて示唆的であると思う。後者の論文はすでに中央公論1月号に特集され、またその全訳はみすず書房よりの『レヴィ＝ストロースの世界』に収められているが、氏は「弁証法が認識し、分析が認識する。両者は区別しなければならぬが、しかし分離することはできない。」「いわゆる共時態と通時態、構造と歴史との対立も、両者の根底におよぶものではない。」「共時態が構造化されているからこそ、通時態は意味を帯びうる諸々の変化からなるものである。」といい、さらに同様のことを、体系と全体化についても、はたまた理論と実践とについてもいっているが、立入った考察ではないが、方向としてはすぐれた知見であろう。しかし、私のみるところは、少しちがう。サルトルも亦、レヴィ＝ストロースとはことなるが、やはり構造をみとめている。しかしその場合でも決して実践の役割り、いわゆる全体化の作用を放棄しないということである。それはどこでいわれているかという、外ならぬサルトルの弁証法の即自且対自態たる〈集団〉の弁証法で述べられている。<sup>17)</sup> 人類が疎外されて集列化され、原子化されている段階が外ならぬ実践的情性態であり、そしてレヴィ＝ストロースの構造主義の世界はまさにそれである。しかし、サルトルはそこから前進し、集団として自覚する



ことによって人類はそこから脱出し、自己を解放してゆくのである。人類の主体性、歴史性がそこにあるわけだが、しかしそれは唯自由としてのみ、あるのではない。まず友愛的結合から出発し、誓約集団、組織集団となり、最後に制度集団として自己を完成するのである。このことこそ、外ならぬ実践はそれぞれその〈組織〉を生産して上昇するということであろう。この場合組織は、いわゆる構造主義のそれと異なること勿論である。しかし何れにせ、唯盲目的に前進するのでなく、組織化しつつ前進するということで、以上の如しとするならば、サルトルとて決して組織を否定するものではないのである。サルトルが自己の実存主義を「構造的歴史的人間学」と定義したことはすなわちこれを指すものであろう。しかし又、ピヨンの立論に立戻ると、ピyonはさらに、その論文の末尾で、サルトルが『批判』第1巻の末尾で全体化するものなき全体の弁証法なるものを持出し、そして、これこそ二律背反の和解への配慮から出たものとしているという。しかしその場合、右のごとく、それは組織を生産しつつ進むところの全体化であるということを意味しているのであろう。このことが忘れられてはならぬ。しかし、何れにせよ、ピyon的見解が一つの卓説であることはたしかだ。また、アルチュセールのマルキシズム解釈は形式と内容の矛盾から内容を捨象し、構造同志の共時的矛盾とするもので、まさにサルトルとは対照的だが、しかしそれは実践の否定ではなく、それを構造主義的に一步後退せしめたものと解すべきではあるまいか。その意味では、ピyonとも一脈通ずるものをもっている。いわゆる高度工業社会に適するフランス型マルキシズムを企図しているのであって、マルキシズムそのものの否定でないことが、注目すべきであろう。<sup>18)</sup>しかし、私のみるところでは、この間のことについて、今ひとつわれわれを理解せしめるものは、言語現象ではなからうか。ということはよりくわしくいえば、ラングとパロールとの関連である。ピyonのいわゆる全体化するものなき全体の弁証法、主体なき弁証法について、典型的なのは正に言語の現象ではあるまいか。以下少しく、この点について述べてみようと思う。

V

私は本稿の頭初において、レヴィ＝ストロースの構造について論じ、それはいわゆる全体とかゲシュタルトのごときものではなく、より多く原子論的単位間の関係ではあるが、しかしまたさりとて数値の如きものではなく、いわゆる力学のモデルに近いものであると述べたが、今このことを想起して頂きたいのである。力学的モデルであるということは、その関係項との間に関係項の幾通りもの置換を有するということであろう。このことがひとつの示唆となるであろう。構造主義は言語について主として共時態すなわちラングに着目して分析を進めたが、右のごとしとするならば、そのことは通時態すなわちパロールの面を悉くシャット・アウトしたということにはならぬであろう。むしろ、その間に何等かの関連のあることを前提としているということだろう。

で、一步進めてその関係について考察すると、考えられるケースは次の三つであろう。すなわち、

- (イ) パロールは早晚ラングに一致し、その間に矛盾、分裂、背反はありえぬということ。
- (ロ) 両者は平行し、その交錯は恣意的であり、その間一定の恒常的関連は見出されぬということ。
- (リ) 両者は相互に背反し、且つ弁証法的に進行するものである。具体的にいえば、ラングはパロール（その集合体）により否定され、古いラングとこのあたらしいパロールとの弁証法的確執により、あらたなる言語体系が生誕するということ。

今このことの何れが可なるやというに、私は弁証法的变化説を鵜呑みにするほど公式的ではないにしても、そういった一面のあることを認めざるをえず、それがいわゆる主体なき全体性の立場ではないかと思われるのである。以下そのことについて少しく述べてみよう。

構造主義言語学がラングに着目し、その史的過程を捨象したことは正にド・ソシュール言語学の大本だが、われわれもまたそのことを認めるにや

ぶさかではないものの、言語には今一半の領域がある。意味論（セマンティクス）と語用論（プラグマティクス）の領域がすなわちこれである。構造言語学は共時態に着目し、意味論を記号学に還元し、また語用論は全然これを取去ったのであるが、これは学的厳密性を保持する上にはすぐれているとしても、〈現実〉の言語を理解する上では、やはり片手落というの外あるまい。現代のごとく言語が変遷し、又意識的に変化せしめられつつある時代には、特に然りである。<sup>19)</sup> そして周知のごとく、この間の事情を考慮に入れて、いわゆる日常語から出発して、意味論の領域においてあらたなるシンタクスの樹立をめざしたのが、外ならぬチョムスキー（Noam Chomsky）の生成文法であろう。しかしチョムスキーの言語学はよくいわれるように、ひとつの言語学であって、文法理論にすぎぬ。これを竿頭一步すすめ、さらにパロールとの、いわゆる出来事との関連においてなそうとするのが、外ならぬポール・リクール（Paul Ricoeur）の『有限性と有罪性』（*Finitude et Culpabilité*, 2 vols）だろう。<sup>20)</sup> しかもリクールはこれをラングとの共同において、ラングの場そのものの中において生ぜしめようとするものである。

そして、このことは歴史の中において徐々に極めて長年月の間に、しかしまた存外短い期間で行なわれているのである。言語組織の変遷についてごく大雑把にその要点のみ述べると、次のとおりである。<sup>21)</sup> まず音韻であるが、変化は極めて緩慢であり、幾世代を経るが、もっとも顕著なのは、同一系列の音韻の間（例えば  $k : g : kh : gh$ ）の間にもっとも生じ易く、且つ変化した相互対比に対しては、安定の回復が図られ、相互依存が図られる。これは印欧語、ギリシヤ語、スラブ語、ゴート語にみられるところである。次に音韻の変化はまた語の形ちに波及してゆく。その間旧体系の変化が不可能となり、長い年月をかけての調整の間に、また他の部分がくずれ、言語にはある意味では、完全に安定したシステムはなく、常に変化しつつあるとも考えられるのである。しかしその間に一定の法則はある。一般に音韻は別として、文法的体系はあまり変っていないのに反して語彙はおどろくべき変化を示すのである。これは私見によれば、単語の重

要性から来ているのであり、ラングとパロールを媒介するものはすなわちこれなのである。（ロラン・バルト説もこれに似ている。）

次に意味の変化についていえば、この領域は殆んど未開拓の分野であり、文献を欠如している始末であるが、これは語彙との関係の深いところから、比較的变化し易く、特に社会状況と大いに関連があるだろう。

しかし、何よりも重要なことは、右のごとく、単語の役割りではあるまいか。単語こそ、ラングとパロールの接点であり、媒介者であって、且つよく出来事や社会事象とも関連するのである。単語は人間精神の〈始源〉の表現であると共に、またそのラングへの接点でもある。このことを明らかにしたのが外ならぬロラン・バルト（Roland Barthes）だろう。<sup>22)</sup> バルトの言語学は主として文芸の言語、特に詩の言語についていったのであって、これを一般化することはむづかしいが、この問題についてのある種の示唆を含むことは、誤りない。バルトは、ラングとは別個に、歴史に登場し、職人によって製作される類型的〈文章〉（エクリチュール）と個人の深淵からほとぼしり出る〈文体〉（スチル）とを区別したが、これは重要なことである。バルトの言語学は単語、文体、および文章と三元の関係を辿ることによって、パロールとラングとの架橋をはかろうとするもので、言語はまず個人の中から単語として発声される。しかしそれは同時に文体となり、ついで文章と接触することによって、歴史の中へ登場し、いわゆるアンガジュマンを果す。しかしその間それは順次メタ言語、またはメタ・メタ言語として客観化される。主観・作者から離れて、客体化することである。そして、この段階ではすなわち「構造」として作用するわけである。しかしかかる構造が先験的にあったラングのそれと異なるものであることは勿論である。

〔注〕

- 1) 構造主義の実存主義、特にサルトルに対する批判はまことに熾烈だが、しかし構造主義の敵手はより多くマルキシズムである。
- 2) 構造とはストラクチャまたはシステムのいいであるが、ストラクチャは共時態、システムは通時態と、厳密に区別して用いるひともいるが、しかし通例両者は殆んど同義に使用されている。

- 3) この国における構造主義の流行もフランスのかかる社会状況と軌を一にするところから出ている。
- 4) ドムナック編伊東守男、谷亀利一訳『構造主義とは何か』（サイマル出版）訳者序文参照。
- 5) 詩の構造については、入沢康夫『詩の構造』（思潮社）参照。また、天沢退二郎氏のエテロトピー論などは詩誌「現代詩手帖」にこの両3年来しばしば展開されている。
- 6) 現代詩の総合誌「詩と批評」8月号拙稿「構造主義と現代詩」参照。
- 7) 例えば前掲書の中のドムナックのエッセー「構造主義の登場」において **Structuralismes** と複数形が用いられている。（邦訳1頁）
- 8) ドムナック編前掲書邦訳4—5頁。
- 9) メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』I，邦訳みすず書房版第1部第6節参照。
- 10) 雑誌「現代の理論」（長洲 一二編，未来社）68年7月号所掲坂本賢三氏のエッセー「構造主義と弁証法」63頁。
- 11) 詳しくは、前掲誌所掲後藤邦夫氏のエッセー「構造的方法の意義と限界」第2節，67—69頁参照。
- 12) 邦語ではラングは言語，パロールは言と訳されるようになって来たが，蓋し通訳だろう。
- 13) 中央公論1月号特集「構造主義」の柴田武氏の解説より借用。（419頁）
- 14) 両者の争点を簡潔且正確に要約したものとして，われわれはジャン・ピヨンの「サルトルとレヴィ＝ストロース」をあげることができる。邦訳『レヴィ＝ストロースの世界』（みすず書房）124—137頁参照。
- 15) この間のことは田島節夫『構造主義と弁証法』（せりか書房）99—105頁にも巧みに解説されている。
- 16) このことについて，サルトルは「アルク」誌30号，サルトル特集号，邦訳『サルトルと構造主義』（竹内書店）中の「バンゴーとサルトルの対話」（220頁）で述べている。
- 17) サルトル弁証法の詳細については，中京大学紀要教養部論叢第8巻第1号拙稿「サルトルにおける個人対社会」参照。
- 18) 下部構造を意味するもの，上部構造を意味されるものとするアルチュセールのマルクス解釈については賛否両論があるが，しかしマルキシズムそのものを否定しているのではないにしても，弁証法を否定することにおいて，よほどマルキシズムから遠ざかっている。
- 19) 例えば国語審議会の活動のごときである。
- 20) ドムナック編前掲書邦訳150頁以下参照。
- 21) 高津春繁『言語学概論』（有精堂）162—197頁参照。

- 22) ロラン・バルト『零度の文学』邦訳森本和夫，現代思潮社。57—62頁。『神話作用』邦訳篠沢秀夫，現代思潮社。137—211頁。なお巻末に付せられた篠沢氏の解説は示唆するところが多い。